

『源氏物語』蜻蛉巻の薫の独詠歌の意義 についての一考察

—物語の終焉との関わりを中心に—

尹勝玟*

(e-mail : miny98@hanmail.net)

<목 차>

- | | |
|-------------|-------------------------|
| 1.はじめに | 3.2. かなわぬ恋への悲しさ、そしてあきらめ |
| 2. 薫と独詠歌 | 3.3. 悲嘆と虚しさ |
| 3. 薫の喪失感の表れ | 4. 薫の独詠歌の機能 |
| 3.1. 宇治との別れ | 5. 終わりに |

キーワード：蜻蛉巻(Kagero Chapters), 薫(Kaoru), 独詠歌(Waka Poem Solo Performance), 源氏物語(The Tale of Genji), 喪失感(Sense of loss)

1. はじめに

「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」と最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の仮名序には、和歌についてこのように定義されている。本格的な歌論の始めとしても評価されている『古今集』の仮名序には、さらに和歌の機能や役割、特徴などが詳しく述べられている。和歌とは、研究者によってさまざまに意味付けられているが、日本人の心情を的確に表す最も優れた方法であるといえるであろう。

また和歌の形態は、独詠・贈答・唱和・手習いなどに分類されるが、こうした和歌の機能について、たとえば時枝誠記氏は贈答歌について近代小説における会話に相当すると

* 韓国外語大学校、日本語通訳学科 非常勤講師、日本古典文学専攻

述べている¹⁾。そして秋山虔氏は物語の場面や心理、さらには主題にまで分け入る和歌表現の役割に注視して和歌の役割を説明している²⁾。一方、後藤祥子氏は和歌のなかでも特に独詠歌について、人物の偽らざる心情が結晶したものだ³⁾と論じており、その他も歌言葉や引歌などの機能をめぐって、小町谷照彦や鈴木日出男氏が先駆的な研究を残しているなど、多様な観点からの研究が幅広く行われてきた。

和歌はそのままでも楽しまれていたが、特に平安時代の物語作品の中に持ち込まれ、作品の魅了をより豊かに作り上げる役割を果たした。日本古典文学の傑作と評されている『源氏物語』の中には795首の和歌が詠まれ、作品をさらに味わい深く織りなしている。

本稿では『源氏物語』の蜻蛉巻にある薫の独詠歌を中心に考察を行うことにする。蜻蛉巻はこの物語の終焉を考える際、以後の展開と関連し、非常に重要な意義を持っている巻であると評価できるし、第三部の主人公薫は蜻蛉巻で我が人生を回顧し、三首の独詠歌を詠んでいるが、これまた作品の展開と深く関わっているといえる。そうした意味で蜻蛉巻における薫の独詠歌を分析することは『源氏物語』の結末をあらかじめ推測してみることができるという点ですこぶる意義のあることだと思われる。

2. 薫と独詠歌

独詠歌について鈴木日出男氏は「他者への通達の意図がまったくない」和歌を意味すると語っている⁴⁾。また鈴木一雄氏は、「心中思惟の歌はもちろん、ひとりごと、すさび書きなど、純粹に自己の心情の独白であり、他に、その受けとめ手のいないもの」であると定義している⁵⁾。小町谷照彦氏も「応答を伴わない一方的な心情の発散、苦悩や心的葛藤、思慕や願望などが表現される」と、独詠歌の特徴について説明している⁶⁾。このように

1) 時枝誠記(1959)「韻文散文の混合形式の意義」『古典会社のための日本文法(増訂版)』至文堂、土方洋一(1996)「源氏物語における画賛的和歌」『むらさき』33、武蔵野書院、pp.55-59より再引用。

2) 秋山虔(1964)「物語文学の研究についての二、三の問題」『源氏物語の世界』東京大学出版会、pp.3-23。

3) 後藤祥子(1968)「独詠歌論—詠嘆の変貌—」『国文目録』7、日本女子大学文学部国文学科、pp.29-41。

4) 鈴木日出男(1998)「源氏物語作中和歌一覧」『源氏物語』6、小学館、p.581。

5) 鈴木一雄(1969)「『源氏物語』の文章」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、pp.95-122。

6) 小町谷照彦(1972)「歌—独詠と贈答」『国文学』学灯社、久保田孝夫(1983)「源氏物語の独詠

独詠歌というのは作品の登場人物が一人、自分の心境を和歌を通して表すものとして理解していいと思われる。『源氏物語』のなかに795首の作中和歌があることは前述したが、そのうち薫の歌は全部57首で、独詠歌は18首ある。こうした薫の独詠歌は他の登場人物の独詠歌数を大きく上回り、『源氏物語』第三部全体にわたって散在しているという特徴がある。薫の独詠歌の数を巻別にみると次のようである⁷⁾。

〈表1〉薫の独詠歌の分布

匂兵部卿巻 1首	橋姫巻 1首	椎本巻 2首	総角巻 4首	早蕨巻 1首
宿木巻 2首	東屋巻 3首	蜻蛉巻 3首	手習巻 1首	

さらに、たとえば光源氏の独詠歌の場合、詠作の契機や対象が明確で、思慕・哀悼・離別などが主な詠作内容であって、漠然と人生を述懐するというような歌はほとんどみられないのに対し、薫の場合は単なる述懐ではなくて契機などが漠然としており、必ずわが身に回帰してくる自閉型の独詠歌となっている点に独自性があるという評価もある⁸⁾。

薫は光源氏と女三宮との間に生まれたと世間では知られているが、実は女三宮と柏木との密通による不義の子である。薫自身、「幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしようおぼつかなく思ひわたれど」(匂兵部卿⑤23)⁹⁾とあるように、小さい頃より我が出生の秘密を感知し、そこから生じる不安や無常感、苦悩、そして実父柏木と母女三宮への報恩の念などの問題を解決する方法として仏道に帰依しようとする。そうした薫の心情が次のような歌として表れている。

おぼつかなく誰に問はましかにしてははじめもはても知らぬわが身ぞ(匂兵部卿⑤24)

どのようにしてこの世に生まれ、またこの先どうなっていくのかも分からない自分の境遇が気がかりである薫の身に添う憂愁と絶望感が鮮明に記されているが、これが『源氏物語』第

歌試論—光源氏を中心として— 『同志社国文学』同志社大学国文学会、p.14より再引用。

7) この物語の主人公光源氏が51首の独詠歌を、最後の女主人公である浮舟の場合、11首の独詠歌を詠んでいる。そして光源氏の独詠歌は、須磨巻12首、幻巻12首、浮舟の場合、手習巻に9首のように特定の巻に集中している。こうした事実と比べると、薫の独詠歌の特徴がよく分かると思われる。

8) 小町谷照彦(1985)「源氏物語歳時事典」『源氏物語必携2』学灯社、pp.107-130.

9) 『源氏物語』の本文の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。引用部分の括弧内の表記は巻名、巻数、頁数を表す。なお、引用に際しては表記を私に改めたところがある。

三部の最初の独詠歌であり、これがまた薫によって詠まれたことも意味深いと思われる。独詠歌というのは他者との交信の希望をもちながら、それが閉鎖されている状況においてなされる場合が多く、物語の表面いきなり独詠歌を伴って登場することは、薫がすでにあらかじめ何かを喪失した者¹⁰⁾であることを意味しているといえるであろう。第三部における薫像がいかに展開されるかこうした歌からもうかがうことができよう。

さらに、本格的に薫と大君との恋物語が始まる宇治十帖の最初の巻である橋姫巻には、次のような薫の独詠歌が出てくるが、この歌は薫の独詠歌の性格や特徴を考える際、非常に重要な意味を持っている。

川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくまに霧りふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱る木の葉の露の散りかかるもいと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかる歩きなども、をさをさならひたまはぬ心地に、心細くをかく思されけり。

山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな
山がつのおどろくもうるさして、隨身の音もせさせたまはず、柴の籬を分けつつ、そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音も、なほ、忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。(橋姫⑤136)

出生の秘密による厭世の念から発せられた道心への志向により、薫は「俗聖」として生きているといわれる宇治の八の宮と交流を始める。その交流から3年ほどの時間が経ったある日、しばらく宇治を訪れていなかったことに気付いた薫は八の宮に会うため宇治へ赴く。いかにも寂しく気持ちまでも「憂し」となりそうな晩秋の宇治の風景が詳しく描かれているが、ここで薫は「山おろしの風に耐え切れずに降り落ちる木の葉の露よりも、なぜかいつそうろくもこぼれてくるわが涙よ」と歌を口ずさむ。ところで、この歌に対し、なぜここで薫が独詠歌を詠まなければならないのかその確実な理由をつかみ難い、あるいは正編の独詠歌と異なる薫の独詠歌の特異性について古くから指摘されてきた。たとえば、土方洋一氏はこの歌について、「確かに和歌の内容はその折の薫の心情の表現であるが、宇治行きの途上にある薫の姿を描いているという場面に即してみた場合、これは作中人物が心中で創作した和歌という通常言われるような意味での独詠歌とはいささか性格の異なるものである」と論じて

10) 松井健児(1985)「薫独詠歌の詠出背景」『国学院大学大学院紀要(文学研究科)』国学院大学大学院、pp.276-279.

いる¹¹⁾。その他も薫の独詠歌には一般的に我々が理解している独詠歌と相異なる部分が多く、そういう意味でさらに詳しく考察する必要があると思われるが、結論からいうと、物語の新たな主人公として登場した薫の多面的な側面をより豊かに表現するための方法としてこうした薫ならではの独詠歌が用いられているといえるのではないだろうか。それによって常に身にまとう薫の底知れぬ無常や喪失感、煩悩、不安などの感情が物語に鮮明に表れることになり、主人公にふさわしく造型されていくことができたと思われる。

3. 薫の喪失感の表れ

3.1. 宇治との別れ

浮舟巻では死を決心した浮舟が匂宮と母中将の君に告別の歌を詠むことで終わり、続く蜻蛉巻では「かしこには、人々、おはせぬを求め騒げどかひなし」(蜻蛉⑥201)とあるように、浮舟の失踪のことが語られ、右近をはじめとする宇治側の人たちの狼狽、驚き、悲しみ、当惑などの様子が描かれている。以後、夢で見た浮舟の姿から不吉さを感じた中将の君が自ら宇治を訪れ、娘の失踪を知り、驚愕を禁じ得ない様子も記されている。浮舟がいなくなった翌日の場面では浮舟を失ったという悲しみの感情は共通しているながらも、浮舟と匂宮との密通を知っている右近や侍従とそうではない中将の君・乳母との間では微妙な相異が存在する。「乳母、母君は、いとゆゆしくいみじと臥しまどぶ」(蜻蛉⑥211)のように、苦しみの末、臥し転び、嘆いている母親と乳母。彼女らとは違い、右近と侍従は浮舟の死の真相が明らかになり、自分たちの過失があらわになることを恐れ、ひたすら事情を隠そうとする。そこで浮舟の遺骸が見つからなかったにも関わらず、急いで葬式を行ったのである。

折しも薫は「大将殿は、入道の宮のなやみたまひければ、石山に籠りたまひて、騒ぎたまふころなりけり」(蜻蛉⑥214)とあるように、母親である女三宮の病氣平癒を祈願するために石山に参籠していたので、浮舟の葬式がすでに終わった後、その事実接する。

殿は、なほ、いとあへなくいみじと聞きたまふにも、心憂かりける所かな、鬼などや住む

11) 後藤祥子(1968)前掲論文、pp.29-41. 松井健児(1985)前掲論文、pp.280-281. 前掲論文、土方洋一(1996)、pp.55-59など。

らむ、などで、今までせる所に据ゑたりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかしと思ふにも、わがたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御胸いたくおぼえたまふ。なやませたまふあたりに、かかること思し乱るるもうたてあれば、京におはしぬ。(蜻蛉⑥215)

驚いた薫の心境が物語に詳しく記されているが、薫はまず浮舟の死の原因がほかならぬ自分が彼女を宇治に放置しておいたせいであり、それがきっかけで浮舟と匂宮が密通にまでつながったと全部自分の過ちであったと反省する。その後、石山から京に戻ってきた薫は病状に臥している匂宮を見舞うが、この場面は『源氏物語』の名場面の一つとして取り上げられるほどの印象的な場面である。すでに匂宮と浮舟との関係を認知していた薫と、その事実を懸命に隠そうとする匂宮の心理が会話の絶妙さによって緊張感漂うものとして丹念に描かれている¹²⁾。浮舟の死の知らせに悲しみのあまり、病気になってずっと涙を流している宮の姿を目の当たりにした薫は匂宮と浮舟との関係が男女の関係にまで発展したと確認し、「焦がるる胸もすこしさむる心地したまひける」(蜻蛉⑥217)と、浮舟の死に対する悲しみや思慕の情も次第に冷めてゆくような気がした。薫の心境に変化が生じたのである。物語が進むにつれ、薫の感情はさらに変化する。浮舟の死の知らせの直後、宇治へ向かうことも考えてみたが、その場合、宇治の邸に赴いた以上は三十日もこもり続けなければならないので、結局宇治行きをあきらめたことがある(蜻蛉⑥222-223)。しかし、どうしても浮舟の死のことが気がかりだった薫は悩みの末、宇治を訪れた。その際「尼君なども、けしきは見れば、つひに聞きあはせたまはんを、なかなか隠しても、事違ひて聞こえんに、そこなはれぬべし、あやしきことの筋にこそ、そらごとも思ひめぐらしつつならひしか、かくまめやかなる御気色にさし向ひきこえては、かねてと言はむかく言はむとまうけし言葉をも忘れ、わづらはしうおぼえければ、ありさまの事どもを聞こえつ」(蜻蛉⑥230-231)とあるように、今まで浮舟の死の真相を徹底的に隠蔽していた右近が薫との対面でもうこれ以上薫をだますことは無理だと判断し、すべての実情を明かす。その話を聞き、薫がいかなる衝撃を受けたかは言うまでもないと思われる。蜻蛉巻における薫の最初の独詠歌はこうした状況で詠まれた。

われもまたうきふる里を荒れはてばたれやどりう木のかげをしのばむ(蜻蛉⑥237)

12) 藤原克己(2009)「薫と浮舟の物語－イロニーとロマネスク－」『源氏物語の透明さと不透明さ－場面・和歌・語り・時間の分析を通して』青簡舎、pp.174-200.

昔より慰めを求めて訪れた宇治というところが浮舟の入水の事実を聞いた今は、ただその名の通り「心憂」き場所でしかないという薫の悲嘆に満ちた心がこの歌によく表れている。「今は、また、心憂くて、この里の名をだにえ聞くまじき心地したまふ」(蜻蛉⑥235)、「今はここを来て見むことも心憂かるべしとのみ、見めぐらしたまひて」(蜻蛉⑥237)と、薫に宇治という地は、ただ思い浮かぶだけでも悲しくつらい場所として認識されていることが繰り返して記されている。道心を媒介とした八の宮との交流からおよそ六・七年の期間の間、数え切れないほど訪れた宇治という地。大君の死後、浮舟を宇治に据え置くことで大君との過ごした宇治での思い出を追い続けようとしたのに、そうした薫の願いも空しく、浮舟は入水を選択し、薫のそばから姿を消してしまった。こうなった以上もう自分がこの宇治に通う理由も意味もなくなったと思った薫は、この名さえ「憂」である宇治と完全な決別を告げようとする。そうした薫の切ない気持ちがこの歌の深層に表れている。薫の絶望感がもたらした宇治との決別。そうすると薫に残るのは自ら距離を置いていた都の世界しかない。この歌の後、浮舟の四十九日の法事のことが記されているが、それを起点に宇治という地は『源氏物語』に登場することはない。そして蜻蛉巻の後半部は都における薫の華やかな生活ぶりが展開されるようになる。

3.2. かなわぬ恋への悲しさ、そしてあきらめ

蜻蛉巻の後半部は都を中心に話が展開するが、その軸の一つといえば、薫による女一宮の垣間見場面とそれに関わる挿話である。

今上帝と明石の中宮の間に生まれた女一宮は、紫上に愛育されたことが第二部に語られている。六条院の南の町の東の対に住んでいると匂兵部卿巻に紹介され(匂兵部卿⑤18)、そして総角巻には宇治への禁足を命じられた匂宮が女一宮のもとを訪問し、『伊勢物語絵』に託して戯れたりする様子なども描かれているが(総角⑤303-305)が、実は物語にそれほど女一宮の実体が語られてはいない。総角巻以来、久々に物語に登場し、その動静が詳しく描かれているのが、蜻蛉巻のこの場面である。

六条院で行われた法華八講が終わった夏のある日の夕方、小宰相の君の局を訪ねた薫は、氷を手ごとに持って騒ぐ、打ち解けた女房たちの姿をのぞき見る事ができた。その際、偶然にもそうした様子を微笑みながら眺める女一宮の姿をも垣間見たのである。この場面ではその女一宮の美しさが、「白き薄物の御衣着たまへる人の、手に氷を持ちながら、かくあらそふをすこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり。いと暑さのたへがたき日なれば、こちたき御髪、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたになびかして引かれたるほ

ど、たとへんものなし」(蜻蛉⑥248)と、詳細に記されている。かつてから女一宮に憧れを抱いていた薫は女一宮のずばぬけた美しさを目撃し、感動を禁じ得ない。その際の薫の気持ち「こころよき人を見集むれど、似るべくもあらざりけりとおぼゆ」(蜻蛉⑥249)と記されているが、薫はその美しい姿を忘れることができず、翌日、その感動をもう一度感じてみたいという願いから妻である女二宮に前日偶然見た女一宮と同じ格好をさせる。同じ衣装を着せた上で色までも同様にし、さらに妻女二宮に氷まで持たせるなど、何もかも昨日と同じ状況を作りあげ、その感動を再現しようとした。しかしながら、そうした薫の願いはかなうことができなかつたのである。「御髪之多さ、裾などは劣りたまはねど、なほさまざまなるにや、似るべくもあらず……ましてこれは、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど、昨日かやうにて、我まじり、心にまかせて見たてまつらましかばとおぼゆるに、心にもあらずうち嘆かれぬ」(蜻蛉⑥252-253)と記されているように、薫の計画は完全な期待外れとして終わってしまった。そこで薫は絶望の気持ちで嘆息するしかなかったのである。

しかし、そこであきらめる薫ではなかつた。満たされぬ自分の気持ちの代償にする目的で女二宮の無聊を慰めるという口実で明石の中宮に頼み、女一宮の手紙をもらったのである。女一宮から贈られた手紙に喜び、募る宮への思慕の情と、一方かなわぬその恋の憂愁などに基づき、薫は歌まで詠むが、それが蜻蛉巻の二番目の薫の独詠歌である。

萩の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける(蜻蛉⑥259)

萩は秋を代表する景物の一つで、萩を詠んだ歌は万葉時代からみえるが、その際は「葦」とともに詠まれたりして、葦の異名ともされていた。萩は、「萩の音」「萩の風」「萩のうは風」「萩の声」といった歌語とともに歌われ、聴覚的なイメージを表す場合が多い。そして萩は特に恋人を待つ思いに寄せて詠まれることもよくみられる¹³⁾。たとえば、「情熱の歌人」と呼ばれている平安時代を代表する和泉式部の歌集『和泉式部集』には「寝覚めねば聞かぬなるらんをぎ風は吹かざらめやは秋の夜な夜な」¹⁴⁾という歌があるが、多情な女の噂を聞いた宮が彼女に対し不信感を持ち、その恋を絶えようとした時、和泉式部は「萩風」という言葉に宮を誘い招く意を込めて先の歌を贈った。すると宮は、「かくて二日ばかりありて、夕暮れに、にはかに御車をひき入れて下りさせ給へば」¹⁵⁾のよう

13) 久富木原玲(2002)「萩」『国文学』学灯社、pp.122-123.

14) 野村精一(1986)『和泉式部日記 和泉式部集』(新潮日本古典集成)、新潮社、p.37.

15) 前掲書、野村精一(1986) p.37.

に、二日後、突然女のもとを訪れる。それをきっかけにますます進展していく二人の恋の様子が『和泉式部日記』にみられる。こうした事例からも「萩風」の効果ははっきり分かると思われる。

薫もここで萩と秋風をともに詠んでいる。こうしたことからこの歌は薫の恋心の表れを意味しているといってもよいのではないだろうか。その相手は無論女一宮である。しかし、女一宮に懸想していることが世間に知られることとなれば、いかなる波紋が生じるか薫はすでに認識している。そこで直後に、「さやうなるつゆばかりの気色にても漏りたらば、いとわづらはしげなる世なれば、はかなきことも、えほのめかし出づまじ」(蜻蛉⑥260)とあるように、けってそういう事実を匂わすまいと決心する薫の様子も記されている。あきらめたくはないが、やむを得ずあきらめざるを得ない薫のあまりにも切実な感情がよく感じ取れる。秋は豊作の季節でもあるが、また一方で寂しい極まらない憂愁の時期でもある。この歌にはまた「露」という歌語も用いられている。露は秋の象徴でもあり、また露は涙を意味したりもする。女一宮への募る気持ちを断念するしかない薫の心情は泣きたかったに違いない。そうした心境が露という言葉を通して表現されているのである。薫の複雑な感情を寂しい秋の景物に寄せ、いかにも薫らしく詠みあげたのがこの歌であるといえよう。

3.3. 悲嘆と虚しさ

最後の独詠歌は、蜻蛉巻の最後の場面に出てくる。

「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ
ありかなきかの」と、例の、独りごちたまふとかや(蜻蛉⑥275-276)

この歌の直前の場面では薫が宮の君という人物を訪れ、話を交わすことが描かれている。宮の君は故式部卿宮の娘であるが、父宮の生前には東宮妃にも期待され、また薫にも縁談があった。そのような高貴な身分の人が、父の死後、継母のつらい仕打ちや望まぬ結婚にまで強いられそうになったため、それを同情した明石の中宮が彼女を女一宮の話し相手でもと思い、宮中に引き取ったのである。しかしながら、いくら親王の娘であり、女一宮と従姉妹同士であったとはいえ、出仕することになった以上には、女一宮とはその身分の差の問題もあり、「裳ばかりひき懸けたまふ」(蜻蛉⑥263)こととなる。そして「宮の君」という名として呼ばれるようになった。当時の慣習では主人の前では女房は裳・唐衣着用の正装が決まりであったため、この服装だと完全に女房レベルまで身分が落ちたことを意味する。そ

れを可憐に思った薫は同じ皇統の人として同情し、他の人より特別な気遣いを見せていた。しかしながら、それだけが薫の宮の君に対する感情のすべてではない。薫は宮の君の境遇を哀れに思いながらも、「もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり、春宮にやなど思し、我にも気色ばませたまひきかし、かくはかなき世の衰へを見るには、水の底に身を沈めても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつつ、人よりは心寄せきこえたまへり」(蜻蛉⑥264)とあるように、上流貴族である宮家の姫君が零落によって出仕するようになったことについては「もどかし」と非難している。再び薫が宮の君のところを尋ねる場面でも薫のそうした見解は変わることがなかった。

薫は「親王の、昔心寄せたまひしものをと言ひなして」(蜻蛉⑥273)とあるように、式部卿宮が生前に薫を宮の君の婿と思っていたことを言い出し、それを口実に宮の君と対話を求める。すると年配の女房が彼女の代わりに返事をしたが、薫はそれに不満を持ち、「人づで」ではなく、直接宮の君と話したいと望む。結局、薫の望み通り、宮の君が薫の言いかげに応じるようになった。そうした宮の君に薫は魅力を感じているのは確かであるが、一方、零落して男性に何の憚りもなく、直に自分の声を聞かせるようになったことには、やはり「なまうしろめたし」(蜻蛉⑥274)と、それを批判的に思ってしまう。さらに「この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人(浮舟…私注)も、かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかしかりしか、と何ごとにつけても、ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける」(蜻蛉⑥275)と記されているように、薫は宮の君のことで亡くなった浮舟を思い浮かび、そのうえ、八の宮家の「一つゆかり」として認めるようになる。しかし、その浮舟はもう自分のそばにいない。そのみならず、八の宮家のほかのゆかりである大君も、中の君も自分と無縁のまま終わってしまったのである。言い換えれば、大君とは死別、中の君は他人の妻、そして浮舟は行方不明というふうに、宇治の三姉妹全員とも結ばれることのできなかった薫には、ただ空虚さや喪失感以外には何も残っていない。その瞬間、薫の目の前を蜻蛉がものはかなげに跳びちがっていた。

この歌で詠みあげられている「かげろふ」は、無論虫の「蜻蛉」として理解するのがもつともであるが、はかなさという意味ではそこに気象現象の「陽炎」のイメージも重なっていると思われる。実体不明の捉え難さや捕ろうとすれば消えたようにいなくなる頼りなさなどの意味¹⁶⁾がこの「かげろふ」という言葉に内包されている。そこで薫は歌の次に「あるかなきかの」という言葉を発するが、これこそ「かげろふ」が持っている本質ではないだろうか。薫と宇治

16) 古賀典子(2000)「かげろふ」秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、p.106.

の三姉妹との関係はすべてが「かげろふ」のように、あるかないかはっきりしないものであった。

4. 薫の独詠歌の機能

以上、蜻蛉巻における薫の独詠歌3首について分析を行ってきた。ここではいったいいかなる理由でこのような独詠歌がそれぞれの場面や状況のもとに詠まれたのか、それを念頭において蜻蛉巻における薫の独詠歌の意義や機能についてみてみたいと思う。

和歌に様々な機能があることはすでに述べたが、土方洋一氏は『源氏物語』のなかには作中人物の独詠とは異質の、地の文と地の文の間にぽっかりと浮かんでいるような様式の和歌があるとし、それをいわゆる「画賛的和歌」と命名し、『源氏物語』の和歌の特有の表現のあり方の一つであると主張した。さらに物語にはめ込まれた屏風歌的な和歌が物語の文面からせりあがってくるとその意義をも語っている¹⁷⁾。また今井上氏は「作中和歌は、この物語の場面構成のあり方と密接に関わっている。地の文と重複したり、その内容を縮約的に表現したかのような和歌が配られることで、ひとつの話題がいった締め括られた印象が読者には強くもたらされることとなる。歌を詠み交わすべき相手を欠いた独詠歌は、散文叙述を締め括り、一連の話題をひとつの場面として定位させる働きを担う」と、土方氏の見解を受け、『源氏物語』の和歌の役割や、特に作中における独詠歌の機能について述べている¹⁸⁾。今までの物語の内容を一応まとめ、その後の新たな展開を可能にする歌が『源氏物語』のなか存在することが確認できたと思われる。蜻蛉巻の薫の独詠歌はまさにそのような役割を果たしているといえるのではないだろうか。

第一首目の「われもまた」の歌の場合、その歌を詠んだ直後、薫は中将の君を訪れ、娘の死のことで悲嘆に満ちている彼女を同情して浮舟の弟どもの後援までを約束する。さらに、浮舟の四十九日の法事まで誠意を尽くして支える。

二人の人の御心の中、古りず悲しく、あやにくなりし御思ひの盛りにかき絶えては、いと
いみじけれど、(匂宮ノ)あだなる御心は、慰むやなど試みたまふことも、やうやうありけり。

17) 前掲論文、土方洋一(1996) pp.55-59.

18) 今井上(2008)「『源氏物語』の作中和歌」『源氏物語 表現の理路』笠間書院、pp.3-21.

かの殿(薫)は、かくとりもちて何やかやと思して、残りの人をはぐませたまひても、なほ、言ふかひなきことを忘れがたく思す。(蜻蛉⑥244)

薫の主催で行われた法事は匂宮や中の君からの布施も加わって非常に盛大に営まれた。浮舟のためにどうしてこのように立派な法要が開催されるのか事情を知らない人からは疑問を抱く場合も少なくないぐらいであった。上の引用文は浮舟の四十九日の法事の場面で記されている匂宮と薫の心情であるが、浮舟の死という事実にあたり、その衝撃のため正気を失うほど悲しんでいた匂宮は、浮舟の四十九日が過ぎるや否や、以前の態度とはうって変わり、新しい恋を探し、懸想するなど、浮舟に対する悲しみも次第に薄れていくことが語られている。一方、浮舟と匂宮との関係を察知した薫は以前純粋に彼女の死を悲しむことができなかつたが、ここでは浮舟を忘れることができず、その代わり、残された家族の面倒を見ることを決めたという。匂宮への見舞いの場面とは完全に変化している浮舟に対する薫の気持ちを確認することができる。しかしながら「われもまた」歌の説明の際、すでに述べたことではあるが、薫にとってもう宇治は慰めの方ではなく、絶望、あるいは喪失の地でしかなかった。出生の秘密がもたらした道心を満たすために訪れ始めた宇治。長い間、宇治は薫の特別な場所として存在した。しかし、顧みれば自分が大切にしていたすべてがここ宇治で消え去ったのである。そこで薫は宇治との永遠の別れの意を独詠歌を通して表したのであるが、これを境に宇治はもうこの物語のなかでは登場しない。蜻蛉巻の次は入水したと思われた浮舟が実は生きていたことが判明し、彼女をめぐる新たな話が展開されるが、その主な舞台は宇治より遙か奥の小野というところである。宇治を舞台とした膨大なストーリーがここで一応幕を閉じ、物語から完全に退場するのである。ある程度まとまった話が独詠歌によって一応総括され、その後、新しい話が始まるという作中和歌の機能について前述したが、まさに「われもまた」という蜻蛉巻の薫の第一首目の独詠歌はそうした役割を果たしていることが判明できたとと思われる。そこで蜻蛉巻の後半は宇治で居場所を無くした薫に唯一残った、しかし自ら距離を置いていたはずの都の世界を中心に展開されることとなる。

蜻蛉巻の後半は薫の華やかな宮廷生活を中心に織りなされているが、浮舟の失踪を描いた前半とその内容に異質さが存在することで、従来から巻の性格をめぐる様々な議論がなされてきた。失踪後の浮舟の生存を薫に伝えるための巻であると把握されたり¹⁹⁾、一つの巻としては主題的な統一性が欠如されているとか²⁰⁾、あるいははっきりした主題的高さが

19) 高橋和夫(1952)「宇治十帖の構成技法について—創作意識に登場する各単元の配置順位の解明を意識して—」『国語と国文学』29(12)、東京大学国語国文学会、pp.22-30.

読み取れない²¹⁾という指摘もある。さらには成立や構想の問題として論じられたりもした²²⁾。こうしたことから巻としての意義はそれほど高く評価されていないようにみえるが、実は浮舟の入水事件をまとめるとともに、作品の終焉にむかって新たな物語の世界を切り開いていくために蜻蛉巻は用意されたといえる²³⁾。前述した薫の「われもまた」の歌をもって蜻蛉巻の前半がまとめられ、そして終焉への新たな物語の展開のために薫の残りの二首の独詠歌がそれぞれ役割を果たしている。

蜻蛉巻の後半の最も重要な事件としては、成立の問題とも関わる女一宮に関することであると述べたが、薫の二番目の独詠歌を導いた女一宮との逸話は、実は薫の道心と愛執の乖離を克明に表しているのである。そしてその基底には薫の実父柏木の影が投影されている。

最上流の姫君に懸想する薫。「后腹におはせばしもおぼゆる」(宿木⑤379)とあるように、女二宮との婚姻の話が持ち出された時、中宮腹である女一宮に興味を持っていたのは確かであるが、現在薫は女一宮の異腹妹と結婚したので、こうした自分の境遇からは女一宮と結ばれる可能性はまったくない²⁴⁾。しかし、以前から女一宮への思いを断ち切れずにいた薫は、偶然垣間見たその姿が忘れられず、妻の女二宮を女一宮の代役にさせたうえで、それにも満足することができなかったため、明石の中宮を通して手紙まで求める。

柏木は女三宮の婿選びの候補の一人であったが、結局彼女は光源氏に降下することになった。その後、柏木は女三宮の異腹女二宮と結婚したが、女三宮への思いを諦念することができなかった。六条院で行われた蹴鞠の日に偶然その姿を見た柏木はその日から彼女への恋情がますます募っていき、宮が飼っていた猫を手に入れ、まるで女三宮の形代のように大事に育つ。こうした宮に対する強い執着がついに密通にまで至るが、女一宮に抱いている薫の気持ちや状況などもかなり柏木と類似している部分が多い。

20) 森藤侃子(1989)は「『源氏物語』のゆかり—蜻蛉巻をめぐる—」『人文学報』207、東京都立大学、pp.23-39.

21) 秋山虔(1954)「浮舟をめぐるの試論」『国語と国文学』29(3)、東京大学国語国文学会、p.53.

22) 小山敦子氏と藤村潔氏は、蜻蛉巻の構想について、女一宮の物語こそが本来の宇治十帖の本筋であると主張する。小山敦子(1959)「女一宮物語と浮舟物語—源氏物語成立序説—」『国語と国文学』36(5)、東京大学国語国文学会、pp.12-27. 藤村潔(1966)「蜻蛉巻について」・「女一宮物語と宇治の物語との関係」『源氏物語の構造』桜楓社、宗雪修三(1969)「「世づかぬ」薫—蜻蛉の巻の独詠歌と主題—」『源氏研究』1、新時代社、pp.288-305より再引用。

23) 蜻蛉巻の意義については、尹勝玟(2013)「浮舟物語における女二宮の意義考察」『日本語文学』日本語文学会、pp.277-300.で論じたことがある。

24) 藤原師輔が妻である勤子内親王が薨去すると雅子内親王を、雅子内親王が亡くなると康子内親王を次々に降嫁され、醍醐天皇の内親王を三人も妻にした例はあるが、これはすべて女性が亡くなった後、新たに迎え入れた例であり、平安時代に内親王姉妹を貴族が同時に妻にした例はない。

このように『源氏物語』第三部では正編のことを受容し、物語の主題に合わせ、新たに変容してその展開に適用する場合がしばしばあるが、これをいわゆる「源氏取り」と呼ぶ。柏木物語の薫物語への影響もこうした「源氏取り」の一つの方法としてみる事ができる²⁵⁾。これにより、我々読者は薫の行動から柏木のストーリーを想起し、薫のこれからの行方を推測することができる。柏木が追った道をまたもや薫も踏襲するのではないだろうか。無論薫は柏木のように女一宮と密通にまで至らないが、薫の諸行動からは彼がいかに愛執に満ちた人間なのかがはっきり示されている。しかし、薫は二番目の独詠歌「萩の葉に」を詠みあげることで女一宮への懸念に自ら自制をかける。つまりここで女一宮との関係を完全に終わらせようとしたのである。作中和歌をもって一つの話がまたも締め括られたのである。

そして「萩の葉に」の歌のすぐ後、女一宮との波紋を恐れ、宮への恋心をあきらめた薫の思いが記されているが、そうした薫の感情が結局行き届いたところが宇治の三姉妹であったことには注目する必要がある。ここで三人とのあまりにも切ない追憶が長々と語られているが、いくら彼女たちとの思い出を回想してみても彼女ら全員を失ったという虚しさを無くすことはできない。薫はその空虚感などを「ただわがありさまの世づかぬ怠りぞ」(蜻蛉⑥261)と、逆らえない運命の仕業として受け入れようとしたが、その一方、そうした感情を紛らすために他の女性と戯れてもみる。しかしながら、薫の心はいつまでも満たされることなく、またもや喪失感に覆われる。そして再び薫は宇治の三姉妹を思い出す。蜻蛉巻の最後の場面である。

薫の心に各印されている自分と宇治の三姉妹との関係性は「あやしうつらかりける契りども」(蜻蛉⑥261)であった。大君とも中の君ともそして浮舟とも結ばれることなく終わってしまったという、自分が求めていた全部を無くしたという究極の虚無感が薫の三番目の独詠歌をもたらしたのである。歌の分析はすでに行ったのであるが、薫にとってすべてが「かげろふ」、無常であったのである。この独詠歌が詠まれた後、長々と語られてきた蜻蛉巻もその幕を閉じる。そして続く手習巻は横川の僧都一行に浮舟が発見されることから始まるが、今までの蜻蛉巻の内容を振り返ってみると、これから語り続けられていく薫物語も少しは類推してみる事ができる。あれほど浮舟に対する愛情を蜻蛉巻で何回も確認してきた薫であったからこそ、浮舟との再会を求め、彼女とのさらなる未来を夢みることは間違いないだろうが、蜻蛉巻で見せた薫の執着と愛執の様子からは、色好みの道で惑い続けていく彼の姿も想像する事ができよう。『源氏物語』の終焉である二人に幸せな将来が待っている余地は当然期待

25) この問題については尹勝玟(2015)「柏木物語の意義についての一考察—薫像の造型への影響を中心に—」『日本語文学』69、日本語文学会、pp.183-206.で論じた。

できないのである。

5. 終わりに

以上、『源氏物語』蜻蛉巻における薫の独詠歌について分析した。薫がこの歌を詠んだきっかけはさまざまであるが、歌の内容は薫の空しい心情を表しているという共通点がある。この三首はただの薫の独詠歌として受けとめても物語を理解するにはさほど問題はないようにも思われる。しかし、「画賛的和歌」という概念をこの独詠歌に適用すれば、物語を総合的な観点からよりの確に把握することもできると思われる。

この三首はいずれもこの歌を詠むことによって薫の心境が改めて語られ、かつ整理され、局面が転換する機能を果たしている。ひとつの話題がいったん締め括られた印象を与え、一連の話題を一つの場面として定位させるという作中和歌の役割をここでも見出すことができる。より広い意味での「画賛的和歌」として理解してもよいであろう。

これらの歌を詠むことによって我々読者は喪失感を抱き、さびしく一人ぼっちの薫の姿を想像することができる。それぞれの場面で、薫を主人公とした一幅の絵をみているような印象も受ける。まるで聴覚的な和歌が視覚的な一つの場面を演出させているともいえよう。

【参考文献】

- 秋山虔(1954)「浮舟をめぐる試論」『国語と国文学』29(3)、東京大学国語国文学会、p.53。
_____ (1964)「物語文学の研究についての二、三の問題」『源氏物語の世界』東京大学出版会、pp.3-23。
- 今井上(2008)「『源氏物語』の作中和歌」『源氏物語 表現の理路』笠間書院、pp.3-21。
- 久保田孝夫(1983)「源氏物語の独詠歌試論—光源氏を中心として—」『同志社国文学』同志社大学国文学会、p.14。
- 古賀典子(2000)「かげろふ」秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会、p.106。
- 後藤祥子(1968)「独詠歌論—詠嘆の変貌—」『国文目白』7、日本女子大学文学部国文学科、pp.29-41。
- 小町谷照彦(1985)「源氏物語歳時事典」『源氏物語必携2』学灯社、pp.107-130。
- 小山敦子(1959)「女一宮物語と浮舟物語—源氏物語成立序説—」『国語と国文学』36(5)、東京大学国語国文学会、pp.12-27。
- 鈴木一雄(1969)「『源氏物語』の文章」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、pp.95-122。
- 鈴木日出男(1998)「源氏物語作中和歌一覧」『源氏物語』6、小学館、p.581。

- 高橋和夫(1952)「宇治十帖の構成技法について—創作意識に登場する各単元の配置順位の解明を意識して—」『国語と国文学』29(12)、東京大学国語国文学会、pp.22-30.
- 野村精一(1986)『和泉式部日記 和泉式部集』(新潮日本古典集成)、新潮社、p.37.
- 土方洋一(1996)「源氏物語における画賛的和歌」『むらさき』33、武蔵野書院、pp.55-59.
- 久富木原玲(2002)「萩」『国文学』学灯社、pp.122-123.
- 藤原克己(2009)「薫と浮舟の物語—イロニーとロマネスク—」『源氏物語の透明さと不透明さ—場面・和歌・語り・時間の分析を通して』青簡舎、pp.174-200.
- 松井健児(1985)「薫独詠歌の詠出背景」『国学院大学大学院紀要(文学研究科)』国学院大学大学院、pp.276-279.
- 宗雪修三(1969)「「世づかぬ」薫—蜻蛉の巻の独詠歌と主題—」『源氏研究』1、新時代社、pp.288-305.
- 森藤侃子(1989)は「『源氏物語』のゆかり—蜻蛉巻をめぐる—」『人文学報』207、東京都立大学、pp.23-39.
- 尹勝玟(2013)「浮舟物語における女二宮の意義考察」『日本語文学』62、日本語文学会、pp.277-300. (DOI: <http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2013.62.014>)
- _____ (2015)「柏木物語の意義についての一考察—薫像の造型への影響を中心に—」『日本語文学』69、日本語文学会、pp.183-206. (DOI: <http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2015.69.009>)

논문 투고 일자 : 2020. 09. 29.
논문 심사 일자 : 2020. 10. 26.
게재 확정 일자 : 2020. 10. 28.

<要旨>

『源氏物語』蜻蛉巻の薫の独詠歌の意義についての一考察
—物語の終焉との関わりを中心に—

尹勝玟

『源氏物語』蜻蛉巻における薫の独詠歌は、彼がこの歌を詠んだきっかけはさまざまであるが、歌の内容は薫の空しい心情を表しているという共通点がある。この三首はただの薫の独詠歌として受けとめても物語を理解するにはさほど問題はないようにも思われる。しかし、「画賛的和歌」という概念をこの独詠歌に導入すれば、物語を総合的な観点からよりの確に把握することができるのであろう。

この三首はいずれもこの歌を詠むことによって薫の心境が改めて語られ、かつ整理され、局面が転換する機能を果たしている。ひとつの話題がいったん締め括られた印象を与え、一連の話題を一つの場面として定位させるという作中和歌の役割をここでも見出すことができると思われる。つまり、より広い意味での「画賛的和歌」として理解してもよいのではないだろうか。

これらの歌を詠むことによって我々読者は喪失感を抱き、さびしく一人ぼっちの薫の姿を想像することができる。それぞれの場面で、薫を主人公とした一幅の絵をみているような印象も受ける。まるで聴覚的な和歌が視覚的な一つの場면을演出させているともいえよう。

A Study on the Significances of Kaoru's Soliloquy Poems in the Volume of
Kagero in *The Tale of Genji*
- Focusing on their Relation to the Demise of the Story -

Yoon, Seong-Min

Kaoru, the protagonist of the third part of *The Tale of Genji*, composes 18 soliloquy poems, which describe his emotions in various scenes. In the volume of Kagero, three poems are recited in three scenes: (i) the scene where Kaoru heard about the death of Ukifune in Uji; (ii) the scene where Kaoru, who failed to be in a relationship with Onna-Ichinomiya, reflects his life; (iii) the final scene of the volume of Kagero where Kaoru melancholically reminisces Uji. There are several motives which led Kaoru to create these poems, one of which is his desire to express his vacant emotion, but what is notable here is that Kaoru narrated his emotions through these poems and sort out his feelings, which drastically shifted several scenes of the story.

All of what Kaoru has sought is Kagero, or impermanence. Kaoru feels the sense of loss as if he lost everything, and he feels alone and lonely when he recites poems. These are indicative that Kaoru realized the death of Ukifune and he would never be in a relationship with her no matter how he seeks to meet her again.